【論　文】

もうひとつの長征

――大後方への旅（一）

楠原俊代

一

西南聯合大学校歌（満江紅）

万里長征
辞却了五朝宮闕
暫駐足衡山湘水
又成離別
絶徼移裁楨幹質

万里の長征
五朝の宮闕を辞却し了り
暫く足を衡山　湘水に駐め
また離別を成す
絶徼に楨幹の質を移し裁え

九州遍灑黎元血
儘笳吹絃誦在山城
情彌切

千秋恥
終当雪
中興業
須人傑
便一成三戸
壮懐難折
多難殷憂新国運
動心忍性希前哲
待駆除仇寇復神京
還燕碣

九州に黎元の血を遍く灑ぐ
儘に笳を吹き　絃誦して　山城に在れば
情いよいよ　切れり

千秋の恥
終にまさに雪がるべし
中興の業
人の傑れしを須む
便ち一たび三戸を成せば
壮いなる　懐も折き難し
多の難　殷き憂いは　国運を新たにし
心を動かし性を忍ばせて　前哲のごとくありたしと希う
待て仇寇を駆除し　神京を復し
燕碣に還らん

＊　闕ケツ、別ベツ、血ケツ、切セツ」雪セツ、傑ケツ、折セツ、哲テツ、碣ケツ」と押韻。

国立西南聯合大学（以下西南聯大と略す）とは日中戦争のさなか、一九三八年四月から四六年五月までの八年のあいだのみ、あるいは八年ものあいだにわたって雲南省昆明に設けられていた大学である。[1] それはまさに日中戦争のために開設されたのであり、先にあげた校歌にうたう「仇寇（きゅうてき）」とは日本軍のことである。

一九三七年七月七日に蘆溝橋事変勃発、同月二十九日には北平（北京）が陥落。このあと八年にもおよぶ日中戦争（中国では抗日戦争という）が始まる。北平陥落後、国民政府は北平の国立清華大学、国立北京大学と天津の私立南開大学を合同して湖南省の長沙に臨時大学を組織するよう命じる。こうして国立長沙臨時大学（以下長沙臨大と略す）、文・理・工・法商の四学院（学部）、一七学系（学科）は三七年一〇月二五日、蘆溝橋事変勃発ご四カ月もたたないうちに開学、一一月一日から授業は始められた。ただし文学院のみ南岳の聖経書院に設置、長沙臨大南岳分校とも称された。南岳とは五大名山の一つである衡山のことである。湘水とは湘江、湖南省最大の河で北に流れて洞庭湖にそそぐ。湖南省政府所在地の長沙はこの湘江の下流東岸にある。

だが戦局はさらに拡大し、日本軍は杭州・太源・上海等を占領。一二月一三日、長沙臨大で授業が始まってからわずか一カ月余りで首都南京が陥落、長沙にも戦火が迫る。このため大学当局は三八年一月雲南省昆明への移転を決定、湖南省長沙で授業がおこなわれたのは三カ月にも満たない。校歌にうたうように、遼・金・元・明・清の「五朝の宮闕（みやこ）」のおかれた北京に別れをつげ、しばらく衡山・湘水に足をとどめたものの、またそこからも退却し山城（やまのまち）、昆明へと向かわねばならなくなったのである。

もちろん移動を余儀なくされたのは長沙臨大のみではなかった。国民政府は重慶に遷都し、多くの人々がその他の大学をも含めて奥地へと難を避け移動した。北京から上海、南京へと搬出されていた故宮博物館・頤和園・国子監等

の文物も貴州省安順、四川省楽山、峨眉の三カ所に分散して再度搬出されなければならなかった。国中に多くの人々の血が流れ、国家の基幹をなすものすなわち「楨幹の質」は大後方、交通困難な僻遠の地「絶徼」へと移されたのである。

このとき長沙臨大は湘黔滇（湖南・貴州・雲南）徒歩旅行団を組織し、二〇〇余名の学生がこれに参加する。かれらは湖南・貴州・雲南の三つの省をむすぶ、少数民族の多く居住する険しく不便な道程約千七百キロを六八日かかって行軍する――実際に歩いたのは四〇日、約千三百キロであったが。この徒歩旅行が校歌にうたう「長征」である。長沙臨大は昆明へ移転後、新学期の始まる前の三八年四月、国立西南聯合大学と改称される。戦争の拡大と長期化のもとで臨時大学という名称はもはや不適とされたのである。

西南聯大の校歌にはさらにこううたう――千秋の恥はついには雪がなければならない。国家の再興のためにはすぐれた人材が必要だ。清華・北京・南開の三大学さえ力を合わせれば、国家の再興と雪辱という大いなる志の挫かれることはない。あまたの困難、ふかき憂いこそ新たな国運を切り拓く。心の動揺に打ち勝ち、前の時代のすぐれた人物のごとくありたいと希う。いつかきっと仇敵を駆除し、都を回復し、華北（北京・天津）の学舎へ戻るのだと。

雲南省は全省の九三パーセントを山地と高原が占める。その省政府所在地である山の町、昆明でこの校歌はくりかえしうたわれたものであろう。行進曲風のこの歌の形式は詞、岳飛の作として有名な「満江紅」と同じ詞牌を用いている。作詞は中国文学系主任を務めたこともある羅庸教授、作曲は言語学の張清常教授。(2)

「満江紅」の格調は沈鬱にして激越、勇壮な情感や胸の内を表現するのにふさわしいとされている。岳飛の「満江紅」もまた愛国の熱情をうたったもので、抗日戦争中にはよく引かれた作品である。西南聯大の校歌はとうぜんこの

岳飛の詞をふまえたものであろう――岳飛の「満江紅」にも新しく曲がつけられていて、その歌唱は行進曲風でたいへん勇壮なものであったと聞く。さらに付け加えて述べるならば、一九一九年五・四の学生デモの翌朝、とうじ清華学校の学生であった聞一多（一八九九～一九四六）がこの岳飛の「満江紅」を紅い紙に書き食堂の入口に貼りだしたこともあった。その聞一多は清華大学中国文学系教授、長沙臨大の湘黔滇徒歩旅行団にも参加し、学生とともに昆明へ移動している。

ここで岳飛の「満江紅」をあげておこう。

満江紅　岳飛(3)

怒髪冲冠
凭欄処
蕭蕭雨歇
擡望眼
仰天長嘯
壮懐激烈
三十功名塵与土

怒髪　冠を冲き
欄に凭れ処
蕭蕭たる雨　歇む
眼を擡げて望み
天を仰いで　長く嘯く
壮いなる懐　激しきがうえに烈し
三十なれど　功名は　塵と土

八千里路雲和月
莫等閑　白了少年頭
空悲切

靖康耻
猶未雪
臣子恨
何時滅
駕長車踏破
賀蘭山缺
壮志飢餐胡虜肉
笑談渇飲匈奴血
待従頭　収拾旧山河
朝天闕

八千里の路　雲と月
等閑にするなかれ　少年の頭も白くなり了り
空しく悲しみのみ切なる

靖康の耻
なお未だ雪がず
臣子の恨
何れの時か滅えん
長車に駕して踏破し
賀蘭山をば缺き
壮志　飢えての餐は胡虜の肉
笑談　渇きて飲むは匈奴の血
待て　頭より　旧き山河を収拾して
天闕に朝せん

＊　歇ケツ、烈レツ、月ゲツ、切セツ」雪セツ、滅メツ、缺ケツ、血ケツ、闕ケツ」と押韻。

岳飛（一一〇三〜四一）は南宋の忠臣で河南省の人、農民から応募して兵士となり大いに金軍を破るが、金への抗戦を主張し和平派の秦檜（しんかい）のために殺害される。秦檜は岳飛の死の翌年、金とのあいだに屈辱的和議を結ぶ。このため岳飛は愛国者として人々の尊敬をうけ、今も杭州西湖の北に岳飛を葬った寺があり、岳飛の石像の前にはひざまずき後ろ手にしばられた秦檜らの像があり、訪れる人々はそこに石を投げたり、棒でたたいたり、顔に唾をはきかけたりしたという。

それまでに中原を失い揚子江を渡って「南渡」したのは岳飛の時代の宋人のみならず、その前には晋人が、後には明人が南渡しており、いずれも失地を回復することはできなかった。そして日中戦争で四度目なのである。西南聯大も北平・天津から長沙をへて遥かなる大後方の地、昆明にまで退却しようやくうちたてられたのであった。昆明に到着するまでの道程は、だがしかしかれらにとっては「退却」ではなく、校歌にうたう「万里の長征」なのであった。この校歌は全部で九三字、双調で、前段には南遷流離の辛苦がうたわれ、後段では教師と学生の不屈の壮志を誉め称え、最後の勝利への期待をうたっている。

その期待はついに実現し、西南聯大は前にも述べたようにわずかに八年のあいだのみ、あるいは八年ものあいだにわたって存在した。この八年間が長かったか短かったか、とまれ西南聯大の歴史は八年間の抗日戦争の歴史に重なる。この間、二千余名の卒業生を送りだし、そのうち八百余名が兵役に服した。

かつて言語学者の趙元任[4]（一八九二〜一九八二）は、こう述懐したことがあるという――中国人には三クラスのひとがいた。ファースト・クラスは後方におもむいて戦下の労苦をともにしたひとたち。セカンド・クラスは、外国に逃げて安逸をむさぼったひとたち。サード・クラスは侵略者について、あやつり人形になり、国を売ったひとたちで

ある。趙元任自身はセカンド・クラスに属すると。

趙元任が一九三八年に昆明を去り、その後の半生をアメリカで過ごしたことで、安逸をむさぼった「セカンド・クラス」の人間だとの説には同意するものではないが、趙元任の言葉をかりていうならば、西南聯大はそれこそこの「ファースト・クラス」のひとたちの集団なのであり、内には学術の自由の気風をうちたて、外にたいしては民主の堡塁となったと高く評価されている。そのスタッフには詩人で散文家の朱自清、詩人の聞一多や卞之琳、中国哲学史の馮友蘭、歴史学の呉晗、政治学の羅隆基、社会学の費孝通、潘光旦等がいたし、学生では中国最初のノーベル賞学者李政道、楊振寧（一九五七年、物理学）他のすぐれた人材を生んでいる。

とはいえ、戦時下における僻遠の地、昆明での生活は並大低のことではなかった。二度にもおよぶ避難、移転のため多くの書籍が失われ、劣悪な教育研究条件のもとで、物質は欠乏し、物価は上昇、生活はますます苦しくなっていった。とうじ助教（助手）であった魯渓も、このような状況のすべてに意気阻喪し、もしもこの自由な空気のもっとも濃厚な聯大にいるのでなければ、とっくに耐えられなくなってしまっていただろうと、その生活の無味乾燥さについて語っている（「我的教書生活――助教生活」）。そしてこのように単調で困難な状況のもとで、かれらをささえる西南聯大の英雄的な伝説とも叙事詩ともなったのが、校歌のまずはじめにうたう「万里の長征」、湘黔滇徒歩旅行団の約千七百キロにおよぶ行軍なのであった。

それではこの徒歩旅行は一体いかなるものであったのか。本稿は、その道程をあたうるかぎりの資料を駆使し再現してみることによって、抗日戦争下における中国知識人の精神史の一面を明らかにしようとするものである。それはまた、この徒歩旅行団に参加した西南聯大教授、詩人で民主運動の闘士でもあった聞一多の生涯の軌跡をたどる基礎

的な作業ともなろう。なお西南聯大の八年間は、近代中国の知的集団の代表ともいえる清華・北京・南開大が一堂に会した最後の一時期でもあった。周知のように、抗日戦勝利ののち国内は内戦状態となり、かれらのうちのある者は国民党を批判し、ある者は新中国成立の前に台湾・アメリカ他へと渡り、また中国に留まった者もそのご反右派闘争・文化大革命で完膚なきまでに批判されるにいたっている。このため、近代中国における知識人については、中国と台湾のいずれの研究においても偏りがみられ、全般的な研究はこれまでほとんどなされていないことを付言しておく。

二

一九三七年七月七日、蘆溝橋事変が勃発したとき、清華大学はちょうど夏休みで、一、二、三年の学生は北平西郊の妙峰山一帯で夏期訓練として軍事演習をおこなっていた。土木系の学生の大部分は山東省済寧県で実習中、卒業する四年生二〇〇余名は大学に留まり、就職活動をしたり、大学院やアメリカ留学の試験準備をしていた。教職員も大部分が学内にいた。政治系教授であった蕭公権[5]は、このときのことを次のように記している。

「清華園でも砲声や銃声が聞こえた。学校からは、安全のため、教職員は家族をつれそれぞれ指定する建物の一階へしばらく避難し、各住居にもどるのは夜間のみとするよう通知が出された。われわれ一家には図書館の一階がわりあてられた。ある日の午後、図書館の入口の外に直径四寸の砲弾が落ちたが、さいわい炸裂はしなかっ

た」（「清華五年」）

このように緊張した情勢が二〇日以上もつづいたのち、同月二九日北平は陥落する。教職員学生はただちに城内に移り、八月には疎開の方法を決定。とはいえ、全員がそろって移動できたわけではない。

たとえば蕭公権の場合は、こうであった。

「そのとき（七月二九日）敵はすでに北京および付近一帯を占拠していた。清華園では前後の校門のいずれにも銃を持った『皇軍』が歩哨に立っていたが、校内の者の出入りまでは禁止していなかった。七月三〇日午前中に、われわれ一家は車を雇い、身の回りの品を携え大学を後にして北京城内に入り、前もって決めてあった民家に移る。その日の午後、わたしはまた車を雇いひとりで新南院（大学の教職員住宅）の住居にもどり、書籍と道具をすこし運びだす。五年間の清華での生活はかくして終りをつげた」（「前掲文」）

中文系教授の聞一多は七月一五日付妻宛の手紙に、耳元で砲声や飛行機の爆音がとどろき、悪いことばかりが頭に浮かんで、文章を書くことも本を読むことも草抜きさえできずにいると書いている。また衣類の整理をし箱につめたりしながらも、確かな情報はつかめないといい、妻が北平にもどることなどについても記している――妻の高孝貞は蘆溝橋事変勃発以前に上の二人の息子をつれ湖北省武漢に帰省していた。その聞一多もこの手紙を書いてから四日後の七月一九日、下のまだ幼い三人の子供とわずかばかりの身の回り品を携え北平を離れる。このとき駅で偶然かれら

に出会った臧克家は、聞一多に蔵書はどうしたのかとたずねたところ、聞一多は「重要な原稿を少し持ってきただけだ。国土がつぎつぎに失われていくとき、本の数冊に何ほどの意味があるだろう」と語ったという。臧克家は聞一多のもと学生で詩人。かれによれば、聞一多の部屋は四囲の壁じゅうが本で埋まっていたというのだが（「我的先生聞一多」）。

清華大学については北平陥落の前にすでに政府の命を受け南遷準備にかかり、一部の機器設備を漢口に搬出していた。『清華大学校史稿』（一九八一年、中華書局）によれば、九月一二日、日本憲兵隊は清華大学に侵入し、図書・機器等を掠奪、このとき難を免れた図書は約五百箱余り。翌年の始めには日本軍は大学校舎に兵士を駐屯させ、八月には全校舎を占領下におく。八年間の日本軍占領期間中、その初期には最高一万余名もの兵士が駐屯し、後には病院――図書館の書庫は手術室、閲覧室は病室――となった。旧体育館は厩舎・食物貯蔵庫、新体育館は厨房として用いられ羽目板や床板まではがされ、科学館・生物館・土木館・水力館等各系の建物も外観はもとのままであったが、内部にはほとんど何一つ残されていなかったという。そのほかに占領軍の酒場・慰安所として供されたとの資料もある。また清華大学には一九二二年度卒業生が贈った噴水があるが、そこにはいまも「日本の中国侵略中に破壊され、一九八六年に修復（原文は〈一九二二級立、毀於日本侵華期間、一九八六年修復〉）」との標示がなされている――ちなみに聞一多、羅隆基は清華学校の一九二一年級であるが、学生運動に参加して留年、卒業したのは一九二二年であった。

国立北京大学には三七年九月三日に日本軍が進駐。北京大学民主広場の「紅楼」として知られた学生宿舎には憲兵隊本部が設けられ、その地下室には「愛国志士」迫害のための牢獄が置かれた。また中国語文学系の入口には「小隊

附属将校室」の札がかけられ、文学院院長室は「南隊長室」となったと、『北京大学校史』（一九八八年、北京大学出版社）には記されている。

一方、天津の私立南開大学は七月二九日早朝からの空襲によって図書館および構内の主要な建物が焼失。翌三十日午後には再度の空襲を受け、三一日には日本人と朝鮮人の無頼が送り込まれ、爆撃を免れた建物に火を放ち、大学の備品および教職員学生の持ち物を掠奪。このようにして南開大学とその附属学校はすべてが灰燼に帰したという（『中国年鑑』一九三八～三九年）。

日本軍は七月二八日、華北で総攻撃を開始、同三一日には平津（北平・天津）地方の「掃討」完了。北平城内の中国軍は古都を戦禍から守るべく撤退、八月八日、日本軍は無血入城する。このため北京大学、清華大学はともに戦火による破壊は免れた。だがその輝かしい伝統は踏みにじられ汚された。北京大学は清末の一八九八年京師大学堂として創設され、五四新文化運動では中心的役割をはたし、また開戦以前における抗日学生運動の重要陣地でもあった。清華大学の前身はアメリカ留学生の派遣養成を目的として一九一一年に設立された清華学堂であり、中国各界に指導的役割をはたした優れた人材を輩出している。そのような大学が、日本軍の将校室となり牢獄・慰安所となったのである。

だが、とうじ六二歳であった南開大学校長張伯苓が、その生涯の夢と努力のすべてが灰燼に帰したとき、「敵はわが南開の物質は滅ぼすとも、その精神は滅ぼせぬ」と述べた（王文田「張伯苓先生與南開」）ように、かくしてこれよりいご徹底抗戦が始まる。

蘆溝橋事変勃発から三七日後の八月一三日、戦火は上海にまで拡大、高等教育機関は北平および海岸沿いの上海・

広東等わずかの都市に集中していたため、またたくまに大きな被害を受ける――三七年八月、九月、一一月には南京の国立中央大学がくりかえし爆撃を受けたし、また翌三八年四月には長沙の国立湖南大学も爆撃を受け、図書館は全壊、学生寮二棟はてひどい打撃を受け、化学実験室は灰燼に帰する。その他にも広東の国立中山大学、梧州の国立広西大学など多くの大学が同様の被害を受ける。

そこで政府は高等教育機関の再建にさいし、後方（内陸部）の都市に分散させる方針をとる。教育部では一九三七年には、北平・天津等の戦地における高等教育を継続するため

臨時大学第一区――湖南省長沙に開設

臨時大学第二区――陝西省西安に開設

臨時大学第三区――開設地未定

の準備を進めていた。そして同年九月一〇日、長沙に北京大学・清華大学・南開大学と中央研究院を中心として西南臨時大学を、西安には北平大学・北平師範大学・北洋工学院・北平研究院を中心として西北臨時大学を設立することを決定――大学の組合せについては、教育部では当初北平師範大学と北京・清華大学を一つにまとめる意向であったが、北師大当局が「むしろ鶏口となるも牛後となるなかれ」ということでそれを望まなかったため、政府は規模もわりあいに小さく歴史も短い私立の南開大と北京大・清華大を一組にし、南開大の抗日精神に敬意を表するとともに戦禍にたいする慰藉としたという話も伝えられている。

とはいえ清華大学の長沙移転の話はもっと早い時期からでていたようで、その前年の三六年三月一七日付、聞一多の游国恩宛手紙にもはやそのことが記されている。また蕭公権によれば、三七年春には湖南省教育庁庁長朱経農から

清華大学に長沙移転にさいする全面的な協力の申し出があったという。その蕭公権は長沙ではまだ危険と、長沙への移転を機に清華大学を辞し、成都の四川大学に移る。のちに成都には燕京・金陵・齊魯・光華等の大学が、また重慶近郊の沙坪壩には中央大学が移転している。

ここで、抗日戦争勃発から三九年一二月末までにおける高等教育機関の被害状況について見ておこう。教育部副部長であった顧毓琇は、当時の『中国年鑑』に詳細な記録をのこしている。かれの記述によれば、次のとおりである。

抗日戦争勃発以前、中国には一〇八の高等教育機関があった。そのうち九一カ所は日本軍によって占領もしくは損害を受け、一四カ所が完全に破壊された。このため三七の高等教育機関が奥地への移転を余儀なくされた。一〇八の高等教育機関のうち八三カ所は移転をも含めなんらかの形で維持されたが、二五カ所は閉鎖のやむなきにいたった。

三九年一二月末までに確認された被害額は、高等教育機関だけで九〇〇〇万米ドル以上にのぼる。たとえば北京大学では一、六二八、五一五ドル（建物は含まず、備品の被害額のみ）、清華大学六〇五万ドル（建物・財産三五〇万ドル、蔵書二五〇万ドル他）、南開大学三七五万ドル。この他にも南開大学の近代経済史関係資料、清華大学の清朝および民国初年の歴史学関係古文書、北京大学の化石など、印刷物の形をとらぬ、したがって金銭には換算することのできない貴重な資料も数多く失われた。

また戦前の学生総数は四一、九二二名、教職員は約一一、八五〇名（教員七、五六〇名・職員四、二九〇名）。このうちおよそ二万名、当時の学生総数の約半数の学生と二千名の教職員が戦禍によって自らの学校を奪われ

る。その結果一、一〇六名の学生が、他大学の臨時学生・聴講生となることを認められる。このような学生がわずかに一、一〇六名であるのは、八三カ所もの高等教育機関がなんらかの形で維持されたことと、多くの学生が学業を中断、軍隊あるいは戦時任務に志願したためである。このほかに四六四名の学生が政府職員として採用されている。また戦争のため生活困難に陥った学生には政府から奨学金が貸与された。外国の諸団体からの寄付もあり、これまでに計六六、八五四ドルが支給された。

（一九九〇年六月十七日）

注

(1) ただしほんの一時期、雲南省蒙自と四川省叙永に分校が置かれていたことがある。蒙自分校は移転直後で昆明に十分な校舎がなかったために開設、一九三八年五月から文・法商の二学部の授業が一学期間のみおこなわれた。叙永分校は、四〇年九月日本軍が北部仏印（仏領印度支那＝ベトナム）への武力進駐を開始、昆明にも危険が迫ったために開設。ここでは一九四〇年度の新入生約千名の授業が四一年一月始めから八月末までおこなわれた。

(2) 西南聯大校歌・校訓制定委員会が成立したのは一九三八年一〇月六日。委員会主席は馮友蘭、委員は朱自清、羅常培、羅庸、聞一多。

作詞者の羅庸（一九〇〇～五〇）は江蘇省江都の人、北京に生まれる。二〇年北京大学中文系卒業、二一年北京大学研究院国学門に入学。中山大学中文系主任、浙江大学教授、北京大学教授、西南聯合大学教授兼中文系主任を歴任。駢文・詩詞に長ずる。抗日戦勝利の後は昆明師範学院国文系主任、五〇年六月重慶にて病死。

作曲者の張清常（一九一五～　　）は音韻学者、言語学教授。貴州省安順県の人、一五年七月生まれ。三四年北京師範大学中文系卒業。三七年清華大学研究院中文系卒業。浙江大学中文系講師、西南聯合大学教授。学生時代から音韻学を専攻し、中国の古典音楽の韻律を音韻学の面から研究、四四年『中国上古音楽史論叢』（重慶独立出版社）を出版。抗日戦勝利の後は南

開大学中文系教授、系主任、兼清華大学・北京師範大学教授、五七年から内蒙古大学中文系教授、系主任。七三年以降南開大学教授、北京語言学院教授、八四年中国語言学会理事、中国音韻学研究会顧問。

(3) 訓読は、武田泰淳・竹内実『毛沢東　その詩と人生』(一九七五年、文芸春秋)、三九二、三九三頁による。ただし、後段九行目の「旧」が脱落しているため補う。

(4) 趙元任(一八九二～一九八二)、原籍は江蘇省武進、天津に生まれる。一九一〇年アメリカのコーネル大学に留学、一五年ハーバード大学大学院に移り、一八年哲学博士。二〇年、清華学校から招聘をうけ帰国、二四年清華国学研究院「導師」、二九年北平中央研究院歴史語言研究所語言組主任。研究所の移転にともない三四年南京、三七年長沙、三八年昆明に移る。同年秋、昆明を去りアメリカへむかう。以後、ハワイ・イェール・ハーバード・カリフォルニア大学教授を歴任、四五年アメリカ言語学会会長、六〇年アメリカ東洋学会会長。アメリカ国籍。

(5) 蕭公権(一八九七～一九八一)は江西省泰和の人、二〇年清華学校卒業後、アメリカのミズーリ大学に留学、政治哲学を専攻、二三年コーネル大学大学院に移り、二六年哲学博士。同年帰国し、南開大学・東北大学・燕京大学・清華大学他で教える。四七年南京政治大学教授、四八年台湾に移り、四九年アメリカへむかう。以後六八年まで一九年間ワシントン大学教授、八一年アメリカで病死。著書は『中国政治思想史』(四五年、重慶商務印書館)、『中国郷村』(六〇年、ワシントン大学出版部)他。